



## ～目次～

√ 1 章目 真夜中のオナニー

√ 2 章目 女の子だって射精したい！

√ 3 章目 授業中にうんちおもらし……

√ 4 章目 ブルマで大決壊！

√ 5 章目 初めてのおむつ登校

√ 6 章目 おむつだから恥ずかしくないもんっ

## ☆小野千影 ～陰キャラでなにが悪い！～

### √5章目 初めてののおむつ登校

「うおおおお！ まさか二日連続でおもらしだなんて……!!」

千影は学校から帰って来るなり、自分の部屋のベッドにダイブしていた。

うつぶせになって、まくらに顔を押しつける。

思いだしただけで赤面ものだ。

(だけど、中井、さんにお礼言えてよかったな)

それがせめてもの救いだった。

もしもあのときトイレに来てくれなかったら、千影はまだトイレの個室で、夜になるまで息を潜ませていたかも知れない。

「これ以上迷惑かけられないし……。でも、勝手に漏らしちゃうし……。でも……。どうにかしなければ！」

息が苦しくなってきた、千影はまくらに押しつけていた顔を起こした。

だけどどうにかしなければと思うけど、具体的になにをすればいいのか決めたわけではなかった。

(……。おむつでも充ててみる?)

冗談のつもりでそんなことを考えてみるけど、だけど意外とグッドアイデアかもしれない。

テレビとかのコマーシャルで、最近の紙おむつは通気性もいいらしいし。

そうと決まれば、財布を持ってドラッグストアにGOだ。

☆

「うわぁ、おむつってこんなに種類あるのか」

ドラッグストアの明るい店内……、その紙おむつ売り場までやってきた千影は目を丸くして驚いてしまった。

男用と女用に分かれているのは想像できたけど、年齢別に細かく分類されているし、介護用の紙おむつまである。

「さて、なにを買えばいいのだろうか」

チビで身体の凹凸に乏しい体型だから、小学校高学年のおねしょ用の紙おむつなんてよさそうだけど。

ピンクの花柄模様があしらわれていて、可愛らしいデザインをしているし。

「こんなに薄いならばんつと代わらないなー。でも、薄すぎてちょっと不安かも？」

あんまり薄型だと、おしっこの吸収量に問題がありそうだ。

もしもおむつから溢れ出してきたら目も当てられないし。

と、なるともうちょっと分厚いおむつがいい。

「介護用かー。こっちはテープタイプなんだ。ちょっと厚手で、安心設計って感じなのかなー」

よし、

千影は決心すると、介護用の紙おむつが詰められたビニル袋を手取る。

ゴワゴワしているから、おむつの枚数の割にかさばってしまう。

あとは、小さな身体で大きな身体で大きなビニル袋をレジに持っていけばいいが――、

(ヤバ、緊張してきた)

この年にもなって、制服姿で紙おむつを買うだなんて、ちょっと……、いや、かなり恥ずかしいことなのでは？

なんだか急に恥ずかしくなってきた、背筋を滝のような汗が伝い落ちていく。

それに、

じゅわり――、

羞恥心に熱くなった秘筋から蜜が滲み出してきてしまう。

そういえば今日は学校でうんちを漏らしてからノーパンのままだった。

……癖になりそう。

(あ、ヤバ……。ふくらはぎにまで垂れてきてる……)

おもらしのように溢れ出してきた愛液が、だらだらと内股を伝い落ちてふくらはぎをくすぐっていく感触。

早く会計を済まさないとおもらしみたいに水たまりを作ってしまう

いそうだ。

残された時間は、あまりにも少ない。

決意を決めた千影は、顔を真っ赤にさせながらもレジに紙おむつを出す。

こういうときは即決が大事なのだ。

……だけどさすがに恥ずかしかったので、

「お、ばあちゃんの介護に使うんですけど……、これで大丈夫ですか？」

あくまでもおばあちゃん用。

レジ打ちをしているお兄さんに、千影自身が穿くんじゃないということ暗に伝える。

ちなみにおばあちゃんは今も元気で毎日ラジオ体操をしている。ごめんなさい。

介護用ならこれで大丈夫だとお兄さんのお墨付きをもらって、しっかりと紙袋に包んでもらう。これであとは帰り道で事故に遭わないようにお祈りしながら家に帰れば OK だ。

☆

「ついにおむつ、充てちゃうんだ……」

千影が呟いたのは、翌朝のことだった。

もうすぐいつもの起床時間だ。

実はゆうべ、深夜アニメを見てからというもの緊張してほとんど寝ることができなかった。

ただでさえ濃い隈は、更に深く刻み込まれている。

「よし、着替えるか」

千影は意を決すると、パジャマを脱いで一糸まとわぬ裸体になる。

そして紙おむつを一枚取り出すと、布団の上で広げてみた。

(思ったよりもゴワゴワしてるかも。けどどしっかした作りになってるんだ)

足口はレース状になっていて、おしっこが横漏れしにくくなっているらしい。

そんな紙おむつに小さなお尻を乗けて、見よう見まねでおまたを包み込んでいって、テープで留めてみる。

「……これでいいのかな？」

学園デビューする初日に使ったきりの全身を映し出すことができる鏡……姿見の前に立ってみる。

そこに映し出されたおむつ姿の自分に、千影は頬が熱くなるのを感じてしまった。

ほとんど男の子のような、チビで貧乳の体型には、そのお尻を覆っている紙おむつはあまりにも大きく見える。

「うわ、あたし、おむつ充てちゃってるんだ……」

急に恥ずかしくなってきた、無意識のうちに脚を閉じようとしてしまうけど、そうするとおむつのゴワゴワ感をより実感できてしまった。

「思ったよりももこもこしてて、脚、閉じにくいかも」

あくまでも、ショーツよりは、だけど。  
ちょっと無理をすれば脚を閉じることができる。

「制服と合わせてみようか」

おむつの上から制服を着ていく。

スカートに覆われているお尻が大きくなって、セクシーに見える、かも？

貧乳だからお尻だけ大きくなって、ちょっとアンバランスかもしれないけど。

だけど千影がまさかおむつを充てているだなんて、誰も想像さえもしないだろう。

☆

初めて生理用品をぱんつの中に入れたときの緊張感を、何倍にも強くしたような感覚。

(こ、これは思っていたよりもレベル高い羞恥プレイ!!)

千影が早くもリタイアしたくなったのは、まだ学校にも着いていない通学路だった。

いつも通っている道のはずなのに、ちっとも気を抜くことができない。

(いつもは風だと思ってもいなかったそよ風が牙を剥いてきやがるぜ……！)

些細なそよ風にもスカートの裾を抑えてしまう。それに歩くたびにカサカサと紙が擦れる音がしていた。

もしかしたら、みんなにもこの音が聞こえているんじゃないだろうか？

(本当は、あたしがおむつを充ててるって、みんな気づいてる、とか……？)

だけどそんなことを言ったら気の毒だから、見て見ぬふりをする、とか……？

そう考えると急に緊張してドキドキしてきてしまう。

(やだ、耳まで熱くなってるよ)

じゅわり――、

羞恥心に、股間が熱く濡れてくる感触。

紙おむつの中は、早くも甘く蒸れようとしていた――。

☆

(ふう、なんとか教室に辿り着いたぜ……)

千影は自分の席につくと、額に浮き上がった脂汗を拭った。

まだ授業も始まっていないのに、とんでもない疲労感だ。

(最初っからクライマックス……！)

だけど今日は座学の授業しかないから、あとはこのままずっと座ってればいいということになる。

おむつデビューする日としてはイージーモードだろう。

……だが。

ブツンッ、教室のスピーカーから短いノイズが発せられると、そ

それはそれは怠そうな男性教師の声が全校放送で流れるのだった。

『えー、これから全校朝会を行うので、生徒たちはグラウンドに集まるように』

その放送に、教室中の生徒たちが非難の声を上げる。

たまに校長の気分次第で、もの凄い長話を聞かされることがあるのだ。退屈なことこの上ないし、立ちっぱなしなので居眠りすることさえも許されない。

(マ、マジでか……)

席について頭を抱えていたのは千影だ。

今日はもうずっと座りっぱなしだと思っていたのに、まさかの全校朝会とは。

ついてないっていうレベルじゃない。

しかも立ち上がろうとしたときに、ツキーンと下腹部に張りを感じる。

(やっば！　そういえば今朝はおむつのことばかり考えてて、トイレに行くの忘れてたぁぁ!!)

ここにきてまさかの尿意。

だけどクラスメートたちは早くも廊下で並んでいる。トイレに行ってる時間はなさそうだ。

もう、おむつを充てたまま、全校朝会に行くしかない――。

☆

(ヤバいっ！ ヤバいっ！ ヤバすぎる!!)

朝礼台に立った校長の話が、お経のように永遠と続いている。  
そんななか、千影は滝のような汗を流しながら尿意と戦っていた。

なんとか立ってはいるけど、ちょっとでも気を抜いたらしゃがみこんでしまいそうだ。

膀胱はすでに水風船のように膨らんでいる。

ちょっとでもおまたから力を抜いただけで漏らしてしまいそうなほどにパンパンになっていた。

(うう、も、漏れる……！ 漏！れ！そ！う！)

だけどなにも我慢する必要はないのだ。

なにしろ千影は介護用の紙おむつを穿いているのだから。

だけどいざおしっこをしようとする、緊張しておまたに力が入ってしまう。

ただでさえ立ったままおしっこなんてしたことがない。

しかも全校の生徒が集まってるグラウンドでおしっこをするだなんて。

女の子は、人前でおしっこなんてしないし、おしっこというものははいつも座ってするものなのだ。

いきなりこんな状態でおしっこをしろだなんて、レベルが高すぎる。

(おむつ穿いてるから、おしっこしてもいいのに！ でも立ったままおしっこしたことないかないし……!!)

こうして逡巡しているあいだにも、膀胱には一滴々々濾過されていき、千影の下腹部はぷっくりとおしっこによって押し広げられていく。

(も、もう漏れそう……！)

キュンッ！ キュウン！

おしっこを我慢しすぎて膀胱が痛くなってきたし、おまたがキュンキュン痙攣してきてる。

身体が警告しているのだ。これ以上おしっこを我慢すると身体に毒だぞ、と。

ヒクッ、ヒククッ！

じゅわ、じゅわわ……。

(あっ、出てきちゃう……)

ジュワッとおまたが生温かくなる感触。

こうなると、ふっくらとしたおまたをどんなに閉じてもおしっこは漏れ出してきてしまう。

じゅわ、じゅもも……。

しゅわわわわわわわ……。

「っ！ っっっっ〜〜〜！」

ついに千影は立ったままおもらしを始めてしまう。

くぐもった水音がスカートの中から聞こえてきて、おむつの内側が生温かくなる。

(しちゃってる!? うそ! わたし、しちゃってる! みんながいるのに、立ったままおしっこしちゃってる!)

しゅiiiiiiiiii……。

人前での放尿。

それは未知の感覚だった。

女はおしっこをするときでさえも個室のドアを閉めてしなければならない。

本来は人前でおしっこなどという行為は、物心がついたら普通はしないのだ。

そんな非現実的な感覚に、千影は耳までも真っ赤にさせてしまう。

だが性欲を持てあます千影は、この快感に早くも順応しようとしていた。

(はぁぁ〜〜〜。立ちションって、こんなに開放的な気分になるんだ……。気持ちいー)

しゅiiiiiiiiii……。

千影は完全に尿道から力を抜き、なんの躊躇いもなくおしっこを漏らし始める。

人前でのおしっこ……、

それは少女にとってはあまりにも刺激的で、背徳的な開放感となって、千影の頬を弛緩させる。



(ああぁ……おむつ、温かい……、おまた、気持ちいい……。って、モコモコ膨らんできてる!?)

しゅわわわわわ……。

もこ、もこもこもこっ。

おしっこを受け止めた紙おむつは入道雲のようにモコモコと膨らんできたではないか。

紙おむつに使われている吸水ポリマーは、おしっこを吸うと膨らむことによっておしっこを閉じ込めるのだが……。そのことを知らなかった千影は、立ち尽くしたままびっくりしてしまふ。

(や、やばい……。スカートから、はみ出してない、よね?)

しゅいいいいい……。

スカートから剥き出しになっている、病的なまでに真っ白い太ももが、恥ずかしくて桃色に染まっていく。

膝がカクカクと震えてきて、ちょっとでも気を抜いたらしゃがみ込んでしまいそうだった。

それでも一度漏らし始めてしまったおしっこを止めることはできない。

しゅわわわわわ……。

(ううっ、おむつ、重たくなってきて……。やだ、腰からぶら下がってきてるみたいっ。このままだと、スカートからおむつがはみ出る！ やばいって！ あたし、変態みたいじゃん！)

しょわわわわわ……。

きゅん、キュウウウウ！

立ったまま身体を大きく震わせる。

スカートの裾が踊って、おむつが見えそうになる。

それでもおしっこは止まってはくれない。ただでさえ短い尿道はふっくらとして柔らかい。どんなに力を入れても最後まで漏らすしかないのだ。

(ああああ……。お尻のほうまで温かくて……。モコモコ広がってて……。凄い……。気持ちいいなんて、あたし、変態になっちゃったみたいだ……)

しゅiiiiiiiiiiii……。

——もしもここでおむつがバレてしまったらどうしよう？  
そんなスリルを味わいながらも、尿意を放っていき……、

ブルルッ！

その痙攣とともに、千影のおもらしは終わりを告げた。

「はぁ、はぁ、はぁ〜〜〜」

終わった。

終わってくれた。

いや、終わってしまった。

その場に立ち尽くし、千影だけまるでマラソンをしてきたかのよう  
に汗だくになっていた。

おまたも汗とおしっこでぐしょ濡れになって、おむつも蒸れ蒸れだ。

いくら通風性がいいからって、汗だくになってしまってはあまり恩恵がないらしい。

(あ、でも、おむつ、思ったよりもサラッとしてる、かも?)

立ったまま、そんなことを思う。

もしもショーツを穿いたままおしっこを漏らしたら、もっとジトジトになっておまたとお尻にべったりと貼り付いてきていたことだろう。

だけど、紙おむつはサラッとしている。

(スカートからおむつ、はみ出してないよね……)

ちょっと心配になって、スカートの裾をただす。

……多分見えていない、と思う。

スカートというちっぽけな布きれに覆われた紙おむつは重たくなっていた。

いくら最新式の紙おむつとはいえ、質量保存の法則には敵わないらしい。

漏らしたおしっこの分だけ、ずっしり重たくなっている。

だけどそれはおむつが千影の失敗を受け止めてくれたということでもある。

もしもおむつを充てていなかったら、太ももを伝ってふくらはぎを濡らし、足下に大きな水たまりができていたことだろう。

(おしっこ、気持ちよかったぁ。人前でおしっこするのって、こんなに気持ちよかったんだ。それに、立ったままするの、開放的で癖になっちゃいそう……)

「ふう」

おむつを充てた少女は、短くも熱いため息をつく。  
その股間は官能の蜜に熱く濡れていて――、  
それは内気な少女が新たな性癖に目覚めた瞬間でもあった。

☆

ぐちょっ。  
全校朝会を終えて教室に帰ってきて、自分の席に着く。  
おしっこを吸った紙おむつが、お尻と椅子に潰されて、なんとも  
言えない感覚に襲われた。

(サラッとしてるけど、ブヨブヨしてる)

だけどその感触でさえも、今の千影にとっては心地よく感じられた。

赤ん坊のような秘筋は、背徳的な感覚に熱く濡れ、おもらしのよう  
におむつをグショグショに濡らしている。

(あっ、おしっこしたいかも……)

しゅiiiiiiiiii……。

教室で。

クラスメートたちがいるというのに、千影はなんの躊躇いもなく  
尿道から力を抜いていく。

最初の躊躇も、緊張感もなくなっている。

千影は、すっかりおむつの魅力に取り憑かれてしまったのだ。

☆

じょぼぼぼぼぼぼ……。

座学の授業中、千影は何度もおむつに尿意を放っていた。

今日はまだ一度もトイレに行っていない。

朝一番のおしっこだっこのおむつにしたし、あれからたくさん水を飲んで、何回もおしっこをした。

それでも紙おむつは千影の失敗をすべて受け止めてくれていた。

(でもさすがに心配になってきたし。ちょっとトイレで見てこよ)

昼休みになって千影は今日初めてトイレに立った。

立ち上がると、ずっしりと重たくなっている紙おむつは腰からぶら下がっているようでもある。

トイレの個室に入って、スカートを捲り上げてみると……、

むわっ。

ふんわりとしたおしっこの香りが立ち昇ってくる。

どうやらおむつといえどもおしっこの匂いを封じ込めてくれるというわけではないようだ。

「こんなこともあるかと」

千影は制服のポケットから、香水の入った小瓶を取り出す。

学園デビュー（失敗したけど）するときに張り切って買ったはいものの、一度も使う機会がなかった香水だ。

まさかこんな形で日の目を見ることになろうとは、千影自身もびっくりだ。

「太もものところにシュッと一吹きして……」

桃色に染まった太ももにシュッと吹きかけて、それを指先でなじませていく。

キリッと、凜とした香り。

千影は甘い香りよりも目が覚めるような香りのほうが好きだった。

これでおしっこの匂いも気にならない……はずだ。

「んっ！」

くちゅりっ。

太ももを触っていると、おまたが熱くなってエッチな音を立ててしまう。

ただでさえおむつの中はおしっこと汗で蒸れ蒸れになっている。

千影のおまたは、おむつの内側でトロトロになっているに違いなかった。

「だけど、換えのおむつ、持ってきてないから……、今日はずっとこのままだけだね」

替えのおむつも、ショーツさえも忘れてきてしまった。

だから今日はずっとこのおむつを外すことができない。

もしもおむつを外せば、汁っ子の千影のことだ。

内股に愛液の滝を作り上げてしまうことだろう。

そうだ、トイレの個室から出る前に――、

「はぁぁ～」

じょぼぼぼぼぼ……。

千影は洋式のトイレを前にして立ったまま、なんの躊躇いもなく尿意を放っていく。

その頬は気持ちよさそうに弛緩していた。

√ 体験版はここまでです。

楽しんでもらえたらとても嬉しいです！！